



怡土城址 奈良時代に糸島郡前原町高祖山に築かれた山城の跡。756年に唐・新羅などと国際関係が緊張した域、兵法家として知られる太宰大武吉備真備が専当となり起工された。768年に完成。(本文19頁)

あけましておめでとうございます。

昨年は、夏の気候が異常だったこともあって、あるいは不況ということもあって、変な年だったような気がします。その中でとにかく一年をまざまざの状況で過ごさせていただいたことは有難いことだと思います。

また、事務所が拡大できて少し広くなりました。これも一昨年以來、手狭になったために、引っ越しを考えていたのですが、「今の場所は立ち寄るのに便利だから他所に引っ越すな」といって反対してくださる方がいて、そのうち7階のフロアが空いて2倍にすることができました。

事務所が広がったことをきっかけに、全国各地の方々のご協力を得て、うまいものをとりよせた「よかネットパーティ」を開きました。たくさんの方に来ていただいた上に、「毎年やれ」といって要求してくださる方もあり、調子によって毎年5月にパーティをやらうと思っています。

また、7階の会議室(30人くらいは収容可能)を使ってくださるよう言っていたのですが、研究会や委員会などに使っていて、「知的サービス業」のはしくれだと思っている私ども事務所にとっては、喜ばねばならないことだと思います。

何卒今後も、事務所、所員ともども丸ごと活用して下さいますようよろしくお願いします。

1994. 1. 1 糸 乗 貞 喜

ドイツ・バーデン・ヴュルテンベルク州の科学・技術開発

—九州北部学術研究都市構想「欧州視察」より—

昨年(1990年)の10月下旬、九州北部学術研究都市構想推進会議による「欧州の学研都市視察」に参加しました。今回の視察は、ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州の研究開発、テクノロジーファクトリー・カールスルーエ、ウルム科学技術都市、イギリスのケンブリッジサイエンスパーク、アストンサイエンスパーク、セントジョンズ・イノベーションセンターを訪れました。今回は、地域の科学技術政策を積極的に実施しているバーデン・ヴュルテンベルク州、ウルム科学技術都市について報告します。

〈高い研究開発への投資比率〉

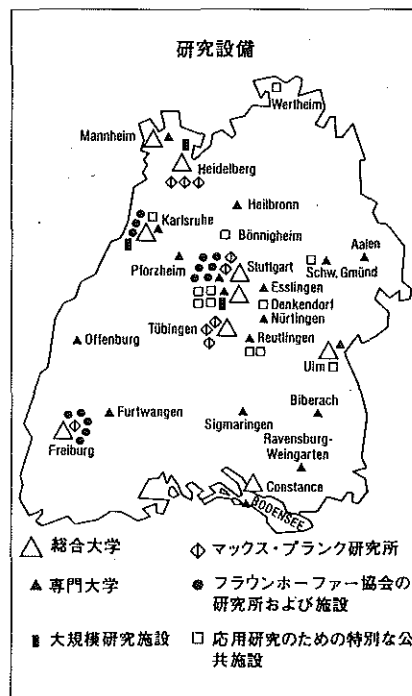
ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州は、ドイツ連邦の南西部にあり、昨年夏に世界陸上大会の行われたシュツットガルトが州都です。人口約1千万人のこの州は、アインシュタインの出身地ウルム市や、ハイデルベルグ大学、ダイムラーベンツ社などのあることで知られています。蛇足ながら、テニスのグラフ、ベッカーもこの州の出身です。

ドイツ連邦内でのこの州人口の比率は約15%ですが、研究者数では約22%を占めており、また研究や技術開発への州の歳出比率は国民総生産額の3.9%であり、連邦全体の2.8%に対して1ポイント高くなっています。これは、遅れていた州の産業構造を農業州から工業州への転換に向けて、集中的に工業開発、研究開発への投資が行われたためであり、その結果バーデン・ヴュルテンベルク州は、ドイツ連邦の中でも代表的な研究地域を形成しました。

〈大学の研究成果を地域産業へ〉

バーデン・ヴュルテンベルク州には、9つの大学に加えて、マックスプランク研究所(基礎研究中心)やフラウンホーファー協会(研究財団)、テクノロジーセンターなど、研究開発、技術開発を専門に行う機

関が州の各地にあり、大学の研究成果の移転、共同研究の実施など、地域産業の技術発展、市場拡大の



バーデン・ヴュルテンベルク州の研究機関等の分布

ための様々な機能が配置されています。また、経済を重視した研究開発への投資のため、個別の機能の充実と同時に、大学の研究成果、技術開発成果をいち早く地域の産業発展につないでいくために、技術アドバイザー、インキュベーター（企業育成）、共同研究システムなど、各機能の連携を推進するシステム、つまりソフトの整備も行われています。

〈アインシュタインの生誕地ウルム〉

アインシュタインの生誕地ウルム市は1992年人口112千人の中都市で、州都シュツットガルト市の南東約70kmに位置しています。市内には、ドナウ川が南西から北東に流れ、ウルム大学は、市街地の北西部にあり、この大学の敷地内にサイエンスパークが建設されています。

〈ウルム科学技術都市づくり〉

州の産業技術政策の重点プロジェクトとしてのウ

ルム科学技術都市づくりは、約10年前の地域の不況から始まります。当時の地域の基幹産業は、建設関係、商業車製造関係の企業が主流でしたが、9万人の従業者のうち、1万人の失業者が発生しました。

その時、幅の狭い業種に頼る都市の経済停滞の反省から、面的にかつ広い範囲での産業構造に取り組む必要性が方針として出されました。そこで、BW州、ウルム市、ウルム大学、ウルム工科大学、地域の企業の5者が集まり、科学的研究開発を強化する取り組みの開始がきっかけでした。

〈経済界、産業界のニーズへの対応〉

その際に経済界、産業界から強く主張されたことは、新しい技術開発、市場に早く出せる技術の研究開発への要求でした。これを受けて、ウルム大学では、研究機能の強化のため、1972年の第一次研究分野の拡張に次いで、エレクトロニクス、電気分野

も く じ

〈NETWORK・ネットワーク〉

2. ドイツ・バーデン・ヴュルテンベルク州の科学・技術開発
4. モノ狂いから脱却する地域産業構造を～九州の先端産業としての地域福祉 2

〈見・聞・食〉

9. パルーンの里づくり
10. 公共と民間とのセット開発型の盛岡手作り村視察
11. 広島流お好み焼きの魅力
12. 特産品クローズアップ③ ースクガラス～沖縄の珍味～

〈近 況〉

13. JR豊肥線での駅舎リフレッシュ
14. 「まち」をどう続け、発展させていくか～T町における人口と農業の議論より～
16. 地方シンクタンク協議会第10回合同研修会「21世紀の地域連携軸をどう考える」

〈本・BOOKS〉

17. 「モモ」ミヒャエル・エンデ 作
18. 「十二支のE話」戸出 武 著



ウルムでのヒヤリング風景

の工業技術部、さらに情報工学部、エネルギー、医学工学の分野設置（1989）が行われています。また、1987年には、大学の敷地内にサイエンスパーク（10ha）を建設し、現在2つのビルに12の企業が入居しています（日本の企業も1社入居）。

〈研究財団による研究機能の強化〉

87年のサイエンスパーク建設と同時に、BW州と企業により、FAW（ウルム大学応用研究開発財団）が設立され、大学の基礎研究と企業の研究開発の橋渡し機能の強化が行われました。ここでは、大学の研究成果を地域に技術移転するため、中企業との共同研究を受託したり、開発研究へとつなぐためのコーディネート（企業ニーズの把握、インフォーマルネットワークづくり）が行われています。また、パークビルには、シュタインバイス財団の素材技術研究センターが入居、さらにダイムラーベンツの4つの部門の研究所の一部がサイエンスパーク内の独立研究所に立地しており、まさに産学の研究機能が集中的に立地しています。

〈雇用の確保のための研究開発〉

このウルム科学技術都市だけでなく、バーデン・ヴュルテンベルク州の科学技術政策にも一貫したコンセプトとして、地域の雇用の確保が挙げられており、企業の新しい研究、技術の創出のため、製品を作りだし、市場に出すことが重視されています。つまり大学の基礎研究を、どういうところに使えるか、企業が何を求めているかということを経橋渡しの機能が重要であること、またサイエンスセンターの整備だけでなく、日々の研究活動の中で、新しいアイデアを生み、実現させていく環境づくりが非常に大事にされていました。（山辺 真一）

モノ狂いから脱却する地域産業構造を

九州の先端産業としての地域福祉 2

〈モノ狂いから転換を〉

今から考えてみると、バブル景気というのは「モノ狂い」時代の終焉をつげる断末魔の苦しみの始まりだったのかも知れない。当時は「モノからココロへ」などといい、宝石や絵や不動産が売れるのは、情報化=心の時代の現れだ、などといっていたが、それはモノ狂いのピークを意味していたのである。

モノ狂いの極みは金であるが、不動産は金より安心なものと考えられたし、いくらか「ゆとり」を現すリゾート地の不動産（このリゾートというものを、その土地でのアクティビティとは考えず、リゾートマンションなどの不動産としてとらえるところが既にモノ狂いであった）は、マーケットの形成さえもなく泡と消えはてた。また、宝石や絵を買っても、そ

れでココロを楽しませる街角やパーティーやゆとりのある家があるわけでもない。まして、そのための教養とやらも不足している。つまりところ、宝石や絵を買っておけば高く売れるんじゃないかという、モノ狂いの極みであるカネ狂いであったのである。

〈日本の経済は不自然であぶない〉

先日、ヤオハンの和田一夫氏の話聴きにいった。ヤオハンが香港へ本部を移して中国大陸志向の経営をすると聞いたとき、上海などで見学した工場の従業員の働きぶりを思い出し、「本当に中国はキャッチアップするのかな」と不安を感じた。あの「大釜の飯を食う」(親方日の丸)という、仕事でも怠慢な動作やおしゃべりの状況からは、現在の中国の高度成長をうかがうことは出来なかった。長期にわたるヤオハンの情報判断力と私の10年前にみた工場見学とでは見通しの差は当然である。

そういうこともあったので、一度和田氏の話聴いてみたいと思っていた。会議の時間の変更まで、無理をお願いして聴きにいったのだが、十分すぎるほどの手ごたえがあった。その中のバブルのところを少し披瀝する。

ヤオハンが移転を決めた当時の香港は、北京天安門事件(1989.6.4)の後遺症で、香港から逃げ出す人ばかりで、株も不動産も最も下がったときであった。当時の日本の株式は、日経ダウが37,000円、香港の株式の指標は2,000ポイントであった。現在は日本が17,000円、香港が9,000ポイントになっている。香港がそんなに上がっているのはバブルではないか、と思うかもしれないが、現在のPER(株価収益率)は15倍程度で、低株価の日本のPERが今だに70~80倍と異常に高いことからみると、不自然さは全くない。

「香港から見ていると日本の株は危なくてしようがない」と言われた。「自然の状態では、株価が下がると自然に上がりはじめるが、人為的に無理して株価を支えているので危ないと思う。もともと資本主義とは自然体の社会であったはず」で、口に出して言われなかったが、PKOとかいって、政府が当座の失点かくしのために無理をして、いずれ国民にしわ寄せをするというのはひどいということのようであった。

〈東京中心の情報化社会が起こしたバブル経済の罪〉

ヤオハンの和田氏の話で一番気分のよかったのは次の点である。「香港が天安門事件で浮足立っているときに、私が金をもって移っていったので大変喜ばれました。会社や不動産を買ってほしい人ばかりで、会うたびに売値を下げてきて、十分吟味した上に、喜ばれながら買うことができました。当時の日本は日経ダウが37,000円で、それで売って香港の一番安いとき買ったわけです。それ以降香港は不動産、株式ともに上がるし、さらにM&Aをして、上場しては資金調達をし、さらにM&Aすることを繰り返していました」という話である。

「株を買ったこともないヤツが何を嬉しそうにしてるんだ!!」と言われたそうだ。たしかに私は、自分の関係している会社か、友人が小さい会社をつくるときのつきあいの株以外に持っていない。これらは世の中の株がいくら上がろうと何の関係もない。それでいても和田氏が得をしたという話は嬉しかった。その理由は、バブルの金の行き先に懸念をもっているからである。

現在の銀行は空前の営業利益率になっている。日経新聞の月曜版に「ふやすなら」と「借りるなら」という項目がある。定期預金でもほとんどが1%台の利

息であるが、貸金の金利は同じようには下がっていない。儲かるはずの銀行が、経常利益ではどこも減益となっている理由は不良債権の償却をしているからである。

株とか金とかは、食べてしまうものではないから、誰かが損すれば、別の人が儲かることになるはずである。ではバブルの儲けはどこへ行ったのか。小さい会社でも経営していると、この預貸金利差というものがよくわかる。

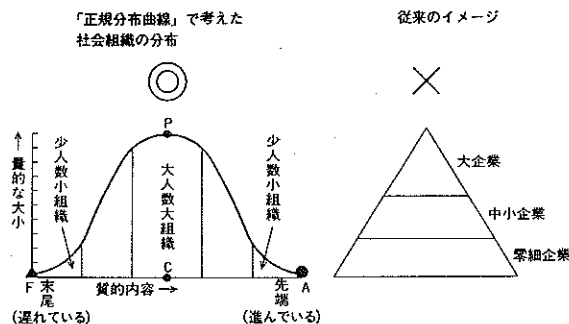
零細企業とはいえ、われわれは動いている金であるからまだいい。しかし高齢者の預金も同じように利息が下がっているのである。このようにして、バブルの失敗の尻拭いを一般預金者にさせているとしか考えられない。

バブルの損は、一体全体どれくらいあるのか。そのうち日本企業が、海外で株や不動産などの投資で被った損はどれくらいか。海外の投資家が日本で株式投資をし、売り逃げて稼いだ金はどれくらいあるのか。また、狂った判断で全国各地で開発できない土地や使えないビルに投資したムダはどれくらいあるのか。誰か教えてほしいものである。日本の新聞やテレビでは、なぜこのことが問題にならないのか。こう思っていたので、ヤオハンの快拳に気をよくしたのである。

よく考えなければならないことは、これらの問題が、東京中心の高度情報化といわれる中で起こっていったことである。悪気をもって誰かがだまそうとしたのならいい。その悪気さえもなく、ヨコナラビ指向で判断した上で悪い結果になってしまい、地方がそれに追従し、皆で仲良く負担するということでは困る。

現在、地方は東京の判断力に追随したために不況

図1 社会構造のとらえ方



になっており、今後もそのマイナスを払い続けなければならない。

〈地域で自前のヘッドクォーターを!!〉

この稿は、もともと前号の続きを書くことにしていたのであるが、ついつい日頃の思いに筆がはってしまった。前号については手紙や電話、会ったときの一言など頂いた。その中に飯沼モデルというのがよくわからなかったという話もあったので、そのことから始めて、手短かに結論まで書いてみる。

飯沼モデルの図を再掲すると、今まで我々が聞かされてきた社会構造というのは右側で、ピラミッド型になっているというものであった(図1)。しかし、現実には時代と共に地域は変遷するので、左側の図のように先導する組織と地域社会を量的に支える大人数大組織と、支えられる(福祉やボランティア等に対応しなければならない)集団や個人などがあると考える。飯沼さんはこの先端の部分(基礎から応用までの研究機関などの組織)の強化が必要だと述べている。

そのことを九州の立場に立って、どの程度問題なのかを実証的に述べてみたい。まず、地域における

九州における地域先導型産業、基幹型産業の不足

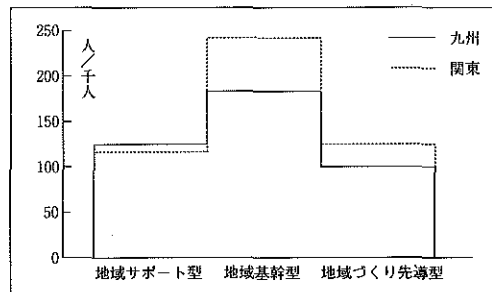


図2 新部門別産業ポテンシャルの比較
(人口千人当たりの従業者数)

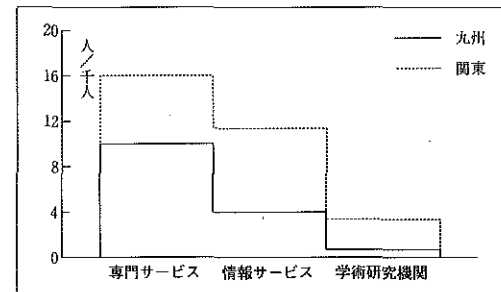


図3 地域づくり先導型部門の代表的3業種

表1 人口千人当たりの部門別産業従業員数

単位：人/千人

	九州	全国	関東	関西
全産業	422.7	485.5	511.3	496.0
地域づくり先導型①	87.6	103.2	121.4	101.0
地域基幹型②	182.8	233.3	242.2	242.7
地域サポート型③	119.4	112.0	112.2	111.8

資料：平成3年 事業所統計調査

注1)

- ①地域づくり先導型産業…地域産業を準備する研究開発等にあたる金融、情報、教育、研究関連産業など
- ②地域基幹型産業…農林水産、建設、製造業、エネルギー通信、販売など
- ③地域サポート型産業…小売業、生活関連サービス、医療、福祉など

注2)

事業所統計によっているもので、農業などの従事者が除かれているが、立論上ほとんど問題がない程度であることは確認してある。

就業者を①地域づくり先導型産業への就業者、②地域基幹型産業への就業者、③地域をサポートする産業への就業者と分けて、人口千人当たり就業者が九州、全国平均、関東、関西でどうなっているかを比較してみようとした。それが表1と図2・3に示しているものである。

(注) この区分は、事業所統計の組み直しによるものである。産業分類などは道具であるから地域の分析に都合が良ければよいと考えて行った。私は地域計画するために地域の立場に立った産業分類というものを10数年前から試行しており、このことはいずれ別稿で。

これで見ると九州は、先導型の第1部門で関東の2/3程度になっている。基幹型の第2部門でも大幅に少ない。それに反して生活関連サービスや福祉などの第3部門は他地域より就業者数が多くなっている。九州は生活関連などで、他地域より就業比率が高いわけであるが、その上に地価が関東や関西よりはるかに安いので、その優位性は比較にならない。その上に、農産物が豊富で気候が良いということがつけ加わる。

「東京の良い企業を引っ張って来れないか」というような声を度々聞かされる。しかしこのことは日本中・世界中考えているわけで、全ての地域でうまく行くことなどありえない。それならば、地域の優位性を活かして産業を育てるしかない。そういうことから考えて、日本の中で優位を保っている「生活・福祉部門」を九州の主力産業として育てたいと思う。そのヒントとなる事例を紹介したい。

〈自然の安らぎ、有明海の水面のゆらぎが感じられる海の病棟、不知火病院〉

まず徳永雄一郎院長のメッセージを紹介する。「今日急激で種々な社会の変化にともない、うつ病やノイローゼ、心身症等のいわゆるストレスによるものと思われる病態が増加しています。そこで当院では、この社会の変化に対応すべくストレス・ケア・センター（通称、海の病棟）を開設しました。この病棟では一日の生活をゆっくりと過ごしてもらうために、あらゆるスペースにゆとりと明るさを重視して病室を作りました。特に当センターから見える有明海の海水の変化は治療的にも意義のあるものだと考えています。一日をゆっくりすごしてもらうことで、自分本来のリズムをとりもどしてもらおうと考えています。」

この病院は昭和35年保養院としてスタートし、平成元年ストレスケアセンター海の病棟を増設し、219床の病院となっている。私がみたのは海の病棟だけであるが、建物はゆっくりとした造りで、開口部も広く、寝ながらにして気候や季節の移り変わりが感じられるようになっていた。

院長の話によると、この病棟の利用者は東京方面が一番多く、九州外が8割位ということであった。俗な言葉で言うと輸出（転出）型のサービス産業である。

このような病院からは、おそらく色々なニーズが発生しているに違いない。それを、育てて開発すれば、多くの健康・福祉機器製造業（工業）が育つに違いない。そして、ここでは消費される農産物も、入院者を通して「外貨」を稼ぐ移出産業となる。「東京の病院などに入るより早く治っているんですよ」という院長の言葉が、十分納得できるような環境を備えたところであった。つまり、サービスの質も高いということである。

九州の特徴を活かし、九州独自の判断で動く産業づくりを進めれば、東京がバブルに狂ってもそれに追従してヤケドを負うこともなくなる。そのために、自前の判断力を備える地域先導部門の強化、九州の持ち味を活かした産業の育成をしたいものである。

（糸乗 貞喜）

お知らせ

九州北部学術研究フォーラム

平成6年2月17日

福岡県・佐賀県の両県で進められている九州北部学術研究都市構想を、産官学のより多くの人に理解してもらい、学研構想の問題意識、めざすところを広くPRするためのフォーラムが開催されます。

テーマは、「21世紀の地域における文化・学術研究」とし、前東京大学総長で現在理化学研究所理事長の有馬朗人先生の基調講演の後、パネルディスカッションが予定されています。

なお、詳細については、当社までお問い合わせください。

バルーンの里づくり

田圃を活かして国際大会

〈バルーンの季節〉

広大な佐賀平野で稲刈りが終わると、いよいよ佐賀にバルーンの季節が到来します。バルーン（熱気球）は、上昇と下降が可能で、水平方向の直進力は一切持たない全く風まかせの乗り物です。このため、バルーンを飛ばすためには広大な空地が必要になります。そこで、この稲刈りあとの佐賀平野が絶好の場所となるのです。

バルーンの季節は、田圃に稲作が行われている期間を除く約半年間ですが、特に11月は気候が穏やかなためバルーンには最高の季節といえます。

〈熱気球国際大会〉

毎年11月の末に、佐賀でインターナショナルバルーンフェスタと称する世界的なバルーン大会を開催しています。期間中（5日間）の人出は平均で80万人、ここ数年は140機ものバルーンが空に舞い上がっています。

今年も11月19日から23日までの5日間、日本選手権やレディースのワールドカップなどを行いました。あいにくの空模様で盛り上がりが一瞬でした。

〈バルーンの経済効果〉

10年にわたる国際大会の開催のおかげで、バルーンの里・佐賀のイメージは全国的にも定着してきたようです。しかしながら経済効果の点では今一つです。会場が、佐賀市の西端の河川敷ということもあって、せっかくの100万人近い人出を直接市の経済の活性化に繋げるのはかなり困難です。



最近、市内外の企業による異業種交流事業の一つとして「バルーントピア」という共同組合が誕生し、初の国産バルーン制作やグッズの制作・販売などを行っています。まだ緒についたばかりです。

これだけの活性化素材を、いかにうまく活用するかが今後の課題です。

（佐賀市企画課 池田 剛）

公共と民間とのセット開発型の 盛岡手づくり村視察

約3年前、ある町の活性化計画にかかわってから、機会ある度に「手づくり村」なるものの視察を重ねてきました。一昨年は熊本県人吉市の「クラフトパーク」、北九州市の「九州民芸村」、昨年は石川県小松市の「ゆのくにの森」（よかネットNO3に掲載）などを視察しました。

今回報告する「盛岡手づくり村」は、これからの地場産業振興と観光とを兼ねた施設づくりとして、このような計画を構想している市町村に度々紹介していたものですが、私自身が実際に体験していないのでは申し訳ないと前々から思いつつ、札幌市の別のセミナーの帰りに急ぎ立ち寄って見てきました。

〈投資25億円に、年間100万人の観光客の確保〉

この手づくり村は盛岡市の中心地から約14km、東北自動車道盛岡インターから約5kmで、市内から定

期バスも出ており、所要時間は約30分と近い位置にあります。当手づくり村の中核施設である「地場産業振興センター」の入り口を入ると、その奥に手づくり工房ゾーンが広がっています。

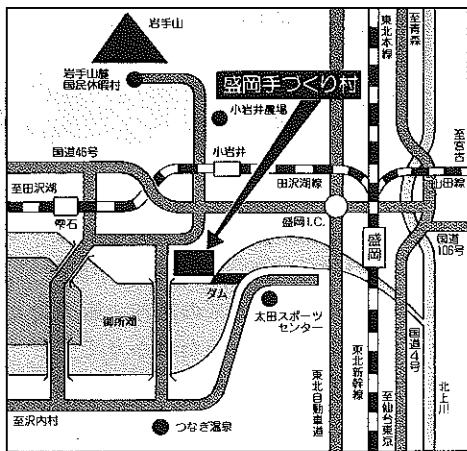
パンフレットなどの図面などからイメージしていたより“こじんまり”としていましたが、約7,000㎡（建物が建っている敷地規模は約1.3ha）の敷地内に南部鉄器工房、藍染工房、お菓子工房など14の企業が入居しており、この場所で実際に品物を創り、販売しています。南部鉄器などは本格的な工場があり、数人の職人さんが忙しく働いていました。

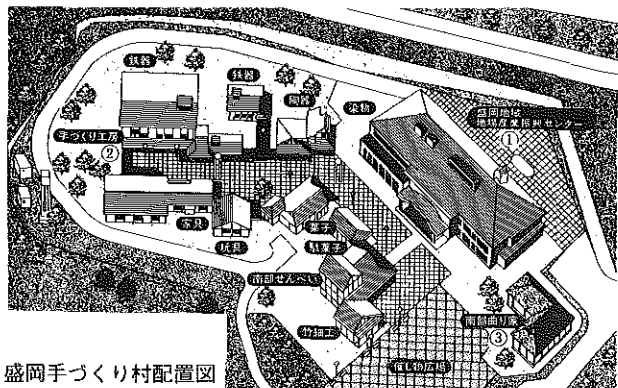
当手づくり村の年間観光客数は100万人であり、過去5ヶ年あまり変動してなく安定した観光客数を確保しているようです。客単価は施設によって多少差があるとしても、一般に事業費と観光客数とのバランスを図る意味で概ね1億円投資に対し、最低1万人の観光客が必要ではないかといわれています。これでいくと当施設の総事業費は約25億円であり、極めて効率のよい施設づくりができたのではないかと思います。これは、当施設が民間最大の牧場である小岩井農場と盛岡の奥座敷である繁温泉とが近くに位置し、観光地のネットワークを形成していることであろうと考えられます。

〈工房がメイン、販売がサブである工房ゾーン〉

工房ゾーンは民間企業の運営であることから「物売り」の攻勢がかなりあるのではないかと想像していましたが、各工房の販売コーナーでは賑やかな購買の勧誘はなく、少し物足りないような感じを受けました。

このような施設では、どちらかというとな販売の方が主であることが多いのですが、この工房ゾーンでは工房の方がメインであって、販売の方がサブのようでした。





盛岡手づくり村配置図

他の手づくり村に比べて少し地味な感じはありますが、「ゆのくにの森」にみられたような「物売り」先行の施設より少し落ち着いて見学できたような気がします。

〈協同組合経営の工房ゾーン〉

当手づくり村は昭和61年5月にオープンして以来、既に6年を経過していますが、工房ゾーンの設立と運営に特徴があり、それが当施設の魅力づくりにつながっているようです。それは中核施設の盛岡地域地場産業センターを県、地場産品生産の市町村、商工会などの財団法人で建設・運営しているのに対して工房ゾーンは地場産品を生産している中小企業のうち、本当に事業のやる意志のある企業のみが参加の呼びかけに応じて参画し（当初15団体が参加）、組合を組織し、企画段階から施設づくりに関わってきている点であります。事業主体も手づくり村の協同組合であり、建設資金の90%を中小企業庁の高度化事業の工場共同利用事業貸付資金でまかなっており、運営・管理も協同組合が独立して行っています。

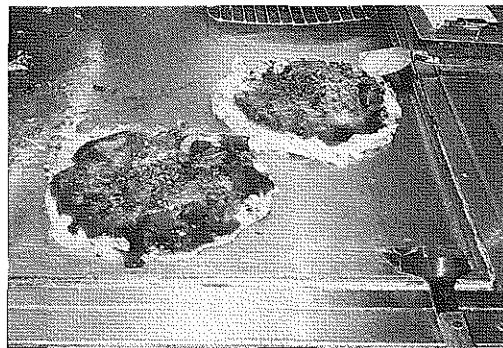
このように当施設は公共と民間との力を合わせた

セット開発であり、これからの開発計画の参考になるのではないかと考えられました。（山田 龍雄）

広島流お好み焼きの魅力

特に理由という理由はないのですが、広島は、私の好きな町のひとつです。福岡ほどおしゃれではないし、原爆の被爆地ということもあって、少し暗いイメージがあるかもしれませんが、でも、どこことなく落ち着いた風情は、旅人の心をなごませてくれます。そんな広島に行って必ずといっていいほど食べるのがお好み焼き。お好み焼きを食べたいがために広島に行っているのかもしれませんが。博多にも、広島風のお好み焼きを食べさせてくれる店はいくつかありますが、やはり本場の味はひと味違います。もちろん、地元広島でもお好み焼きは大人気で、食事になると、有名な店は行列ができるほどです。

このお好み焼き、戦前から「一銭洋食」という名で、大衆的な食べ物として人気を集めていたとか。その「一銭洋食」がいろいろと工夫され、今に受け継



うまくひっくり返せました

がれて、今日の広島流お好み焼きになったそうです。

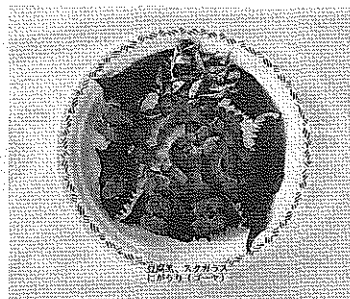
さて、どこが広島流なのかというと、その焼き方のちがいがい。材料をあらかじめ混ぜて焼く関西や関東の混ぜ焼きに対して、広島流は、ちょっと手がこんでいます。水どきの小麦粉を、鉄板の上に、クレープを焼くようにまるく薄くのばし、その上に、キャベツともやしをやまのようにのせ、天かす、ねぎ、肉やいか、えびなどをどっさり盛って焼くというやり方です。このクレープ状の皮こそが「広島流お好み焼き」の最大の特徴で、年季のはいったその道のプロでなければなかなかうまく焼けないとか。皮を薄く伸ばして焼き、具をかさね、豪快にひっくりかえす店のご主人のあざやかな手さばきは、まさに職人芸。また、そばやうどんなどの麺、卵を重ねて焼くのも広島流ならではのもの。これを一度食べると、そのおいしさに病みつきになることまちがいなでしょう。広島には、何と約2,000軒もの店があるようですが、新しくなった「お好み村」(3階建てのビルに15、6軒のお好み焼き屋さんがある)でいろいろな店の味を試してみるのはいかがでしょう。広島といえば牡蛎が有名ですが、ぜひお好み焼きも本場で食べてみてください。(富重 慶子)

特産品クローズアップ ③

—スクガラス～沖縄の珍味—

スクガラスは辛い。ひどく塩辛い。しかし、豆腐の上にスクガラスをのせて出てくるスクガラス豆腐は、沖縄で泡盛を飲むときの最高の肴である。

スクガラスとは、沖縄でいうところのスク(アイゴ)の2～3cmの稚魚をそのまま塩漬にしたものである。



スクガラスと
ゴーヤ(にがうり)

口に含み歯で噛むと、硬いスクの皮膜の下に肉とも内臓ともつかないホロ苦いエキスが口いっぱい広がる。この苦い旨みが泡盛に最高によく合う。

辛くて苦いスクガラスを強い泡盛でガーンと頂き、三線の音を聴きながらあやしく酔っていくのが南の島の夜のヨロコビである。

一般に市販されているのは、大半が瓶詰め工場製品であるが、現地では自家製を出してくれるところもある。自家製では塩辛さを若干落とすし、代わりにコーレーグース(唐辛子の泡盛漬け)を混ぜて唐辛子の辛さを加えたものなど様々。

私が学生時代、沖縄出身の友人に連れてってもらったコザの酒場で出てきたのは、ハイビスカスを入れて朱色に染まった酸っぱいものだった。

パーティーでは沖縄県の外郭団体・沖縄物産公社から取り寄せ、ゴーヤ(にがうり)のサラダとあわせてみた。塩辛さの利いた正調スクガラスだった。

(尾崎 正利)

〈連絡先〉沖縄物産公社

〒900 沖縄県那覇市旭町1番地沖配ビル7F
TEL 098-861-0555 (1842, 7896)
FAX 098-868-4234
福岡事務所もあります

JR豊肥線での駅舎リフレッシュ

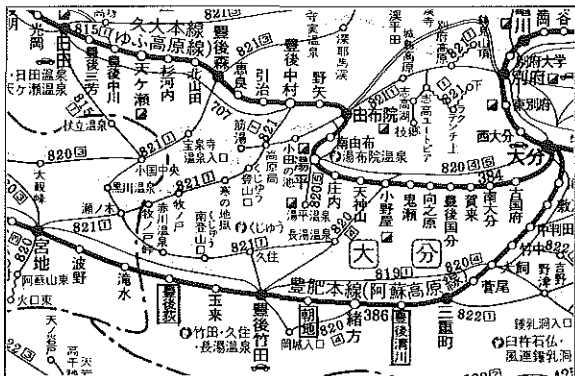
駅舎の老朽化に伴い町のシンボル、あるいは町づくりの一環として駅舎のリフレッシュ計画が全国的に盛んになりつつありますが、11月の始め頃、豊肥線での駅舎建替えの視察に行く機会であり、実際に建替えに携わった担当の方に、導入施設や補助金の内容等の話を聞いてきました。

そこで、視察した駅舎毎にその概要を簡単に紹介します。

〈建替え後の駅は、単なる併設機能〉

大分県は清川村、朝地町、萩町、竹田市の4市町の4つの駅を見ましたが、実際に話を聞いたところは3町であり、それぞれ特色のあるリフレッシュを試みていました。3駅に共通していることとしては次のようなことがあげられます。

①駅舎そのものの建替え事業費は自治体負担であり、列車の運行に係わる設備や建築関係（駅舎の改札口を出てプラットホームから先の部分）はJRの負担と



豊肥線の位置

〈豊後清川駅〉



- ・事業主体：清川村
- ・施設の内容：清川村物産センター
- ・規模：251.5㎡（駅：164.5㎡、物産センター：87.0㎡）
- ・事業費：31,900千円
- ・導入補助金：県の補助事業である農村地域定住促進対策事業とふるさと創生事業

〈朝地駅〉



- ・事業主体：朝地町
- ・施設の内容：ステーションギャラリー
- ・駅舎規模：約116㎡
- ・事業費：25,104千円
- ・導入補助金：商店街リフレッシュ事業（7,154千円）

なっていること、②駅改札業務はそれぞれ地元の方が行っており、JRの委託となっていること、③基本的にはJR用地を買収、あるいは払い下げを受けて建替

〈豊後萩駅〉



- ・事業主体：萩町
- ・併設施設の内容：ふれあい会館
- ・駅舎規模：約411㎡
- ・事業費：132,344千円
- ・導入補助金：リフレッシュふるさと推進事業
(41,696千円)

える訳であるが、朝地駅では借地として建替えており、ギャラリーで物販販売をする場合には一定の借地料をJRに支払うようになっているとのことでした。

これらの駅建替え施設は、逆の言い方をすると建替えた施設は駅ではなく、主な施設に改札機能が併設しているということになります。

特に3つの駅の中でも最も規模の大きかった豊後萩駅は町内外の交流機能をメインとした「ふれあい会館」としており、延べ面積の9割近くは「ふれあい会館」であり、列車の発着がない7:00以降は駅機能の部分は完全に締切りとなり、「ふれあい会館」のみが利用できるような動線計画となっています。このことから見ても駅は単なる部分にすぎません。

各市町村の中心駅は町でも利便性の高いところであり、また、貴重な用地であることからみんなで知恵を出し合って複合的な利用を考えていく必要があるでしょう。

(山田 龍雄)

「まち」をどう続け、発展させていくか

～T町における人口と農業の議論より～

T町は福岡県の農村部に位置する人口1万人の町である。近年に至って、町では人口の減少、特に若年層の減少が続き、人口は隣接する町への通勤によって支えられている状況である。また、農業を主要施策に挙げている一方で、農家数、農業従事者の減少が続いている。

最初の問題を議論するため、表1を作った。この表は①人口は中学校(10～14才)まで大きくは減少しないが、②高校、大学進学時(15～20才)に減少、③大学卒業後(20～25才)に帰ってきて、人口は落ち着く、という動きをみようとしたものである(男子のみ)。もし大学卒業後も減少が続くとすれば、大卒後の就業先が周辺にないか、定住先としてその町を住みよいところとはみなさなかつたことになる。

以下実際の表を見ながら特徴を拾ってみる。

- 戦後の第一次ベビーブーム世代(S21～25生まれ)は、827人生まれて、437人が地域に定着している。
- 次の5才若い世代は、661人が366人に減っている。前の世代より少ないが、一応地域を支えるだけの数が残ったことになる。
- 次の世代(S31～35生まれ)から問題が大きくなる。スタート時点ですでに10年前の世代より350人少なく、定着した人も100人以上少ない。
- 次の世代はスタート時点で20年前の定着数より少なく、さらに問題である。
- それ以降も同様のことが続いている。

町にとっての最重要問題は、その町がにぎわい、そして「続く」ことである。T町が続いていくために必

表1 T町における男性人口の推移(資料:国勢調査)

単位:人、%

年齢	昭和21~25 年生まれ	昭和26~30 年生まれ	昭和31~35 年生まれ	昭和36~40 年生まれ	昭和41~45 年生まれ	昭和46~50 年生まれ	昭和51~55 年生まれ
10~14	昭和35年 827(100.0)	昭和40年 661(100.0)	昭和45年 503(100.0)	昭和50年 422(100.0)	昭和55年 449(100.0)	昭和60年 471(100.0)	平成2年 453(100.0)
15~19	昭和40年 584(70.6)	昭和45年 503(76.1)	昭和50年 422(83.9)	昭和55年 370(87.7)	昭和60年 383(86.3)	平成2年 417(88.5)	
20~24	昭和45年 390(47.2)	昭和50年 381(57.6)	昭和55年 305(60.6)	昭和60年 278(65.9)	平成2年 220(49.0)		
25~29	昭和50年 430(52.0)	昭和55年 417(63.1)	昭和60年 308(61.2)	平成2年 217(51.4)			
30~34	昭和55年 437(51.6)	昭和60年 381(57.6)	平成2年 289(57.5)				
35~39	昭和60年 444(53.7)	平成2年 366(55.4)					
40~44	平成2年 437(52.8)						

表2 品目別、農業粗生産額の推移(1990年)

単位:百万円、戸、%

	総額	農家数	戸当り 平均 (万円)	耕 種				
				計	米	野菜	果実	花き
T町	1,866	1,317	141.7	1,645 (100.0)	1,026 (62.4)	361 (22.0)	47 (2.9)	37 (3.3)
A町	1,854	649	286.7	1,654 (100.0)	472 (28.5)	345 (20.9)	687 (36.0)	95 (5.1)
B町	2,158	439	491.6	1,924 (100.0)	559 (29.1)	1,054 (57.8)	37 (1.7)	192 (8.9)
C町	5,933	2,172	273.3	5,217 (100.0)	774 (14.8)	1,553 (29.8)	1,810 (30.5)	195 (3.3)
D市	9,363	2,029	461.5	7,236 (100.0)	1,414 (19.6)	1,435 (19.8)	709 (7.6)	2,499 (26.7)

資料:「福岡農林水産統計年報」

要なのは、今の人口を定住させることであり、それができない場合には、出ていった分の人口を外から呼べるような施策が必要である。

次に後者、農業の振興について考えてみたい。

表2は、福岡県内で農業が盛んと思われる4町と、T町との比較であり、農業粗生産額とその主な内訳、農家の戸当たり平均額についてみたものである。まず第一に、農業で儲けている町はいずれも、米だけで

表3 農業従事者に占める、20~59才の男子従事者割合の比較

単位:人、%

	農業従事者 総数	20~59 才男子	比率
T町	1,920	178	9.3
A町	1,278	231	18.1
B町	868	166	18.7
C町	4,344	985	22.6
D市	3,798	785	21.2

資料「90 農林業センサス福岡県」

なく「多様な農業形態」をとっていることが分かる。以下、具体的な数字を拾ってみる。

- T町では、レタスや苺などを特産品としているが、米の生産額が約10.2億円で全体の62.4%を占めている。
- 例として挙げた4市町では、米の占める率はいずれも15~30%と低い。
- B町は野菜が57.8%、C町は野菜と果実で60.3%

と、米以外の品目での収入が大きなウェイトを占めている。

また、表3は、主として農業に従事した人の中に20～59才の従事者の占める割合を、上と同様の4町で比較したものである。これを見ると次のことが分かる。

- 農業振興の中核をなす20～59才の男子農業従事者は、比較として挙げている4市町がいずれも20%前後なのに対し、T町は10%弱である。
- T町の農業形態は、60才以上の男女と30～59才の女性従事者が全体の多数を占める、いわゆる「3ちゃん農業」である。

これらのデータを議論のネタにしたのは、「この町で農業は無理だ」というためではない。農業を生かす方策はアイデア次第だと思う。そして、「農業を生かすまち」として、T町が続いていき、そして発展していくには、現況の人口・産業構造をみる限り、他の町村とは違った方策を必要としている

(北村 茂樹)

「21世紀の地域連携軸を考える」

地方シンクタンク協議会第10回合同研修会

■ 地方シンクタンク協議会の第10回合同研修会が、「21世紀の地域連携軸を考える」と題して10月28日、名古屋ターミナルホテルで行われました。(東京のシンクタンクよさようなら)

まず基調講演として、NIRA理事長の星野進保氏が講演。過去の全国総合開発計画の流れを軸として、「最近地方のシンクタンクが成長してきており『東京のシンクタンクよさようなら。地方のシンクタンクよこんにちは』が私の合言葉になっている。地域の事

は地域のシンクタンクが一番知っている」「国土の軸というのは、最初から国が設定するのではなく、後になってみると軸になっているというのが理想」などの話がありました。

〈自分のまちに愛着が持てるか〉

分科会では「情報ネットワーク」「高齢化と人づくり」「生活文化」の3つの視点に分かれましたが、それぞれが「地域連携軸」というものと結びつきにくかったようでした。その中で印象的だった話を挙げてみます。

- ・ 情報インフラ整備よりも足で稼ぐ人的ネットワークの方が良い情報を作る。
- ・ 地域の情報が外に出る事が地域の連携につながる。
- ・ 高齢者の面倒は地域でみるのがよいが、小さな地域では支えられなくなり、地域の連携が必要になっている。
- ・ コンパクトな競争と交流が地域を濃密にする。

総括として、「今自分の住んでいるまちが好きか」というアンケートに対し、YESと答えたのは欧米で6～7割、日本や韓国では2～3割であった事を例にとり、地域の発展は結局“自分の住んでいる町に愛着が持てるか”の問題である、という話で締めくくられました。(伊藤 聡)

■ 10月29日(金)の地方シンクタンク協議会 エクスカーションに参加。

まず、平成4年10月に開館した愛知芸術文化センターの見学から始まった。ここは、総工事費 630億円という私には想像もつかない大量の札束で出来た国内初の総合文化施設である。地上12階地下5階からなるこの建物は12階までが吹き抜けになっており、

美術館、芸術劇場、文化情報センターが配置されている。中は明るく、一種の気分転換にはなりそうだが、私の名古屋在住の知人はまだ一度も訪れていないようだ。

次に瀬戸市の方へ向かった。行く途中わかしゃち国体に向けての高速道路等の整備工事がやたら目についた。人口12万7千人のこの街は私の知っている焼き物の町とはほど遠く、とても煙たい印象を受け

た。特に、普通の狭い路地裏をひっきりなしに通っていく大型ダンプには非常にびっくりし、私は住めないな、と感じてしまった。もっと素晴らしい所もあるのだろうが時間が短かく、観て廻れなかったのが残念である。(名物の五目飯は美味だった)

初めての名古屋市は、道路が広く、住みやすそうな印象だった。また、ゆっくりと遊びに行きたいと思う。(神野 みつえ)

「モモ」 ミハエル・エンデ作

大島かおり 訳 (岩波書店)



主人公モモは、どこかの国のどこかの町の円形劇場の廃墟に、いつのまにか住むようになった女の子。やせっぽちで、身につけているものは捨てたものやもらいもの、生まれてからずっとくしを通したこともはさみをいれたこともなさそうな、くしゃくしゃにもつれた真っ黒な巻き髪で、足は、ほとんど裸足という、ひどい格好です。でも、その大きくて黒い

ひとみはとても美しく、また、他の誰も持っていない素晴らしい才能を持っていました。それは、人の話を聞くということです。相手の話を注意深く聞く、ただそれだけのことで、相手の話をきくことで、その人に自分自身を取り戻させることができる、という素敵な力を持っていました。これは、途中でさえぎったり、言葉をはさんだりしないで、相手が自分自身の気持ちを見つめ、自分自身の言葉で話し始めるまで辛抱強く待つことができるということなのでしょう。

この物語は、不思議な能力を持ったモモが、周りの人々を少しずつ蝕んでいく「灰色の男たち」の陰謀からみんなを救い出すという話です。モモとともに、ゆとりを持ち心豊かに暮らしていた人々が、「灰色の男たち」の言葉に惑わされ、バラ色の未来のため、幸福のためと信じて必死で時間を節約し、せかせかと働き、あわただしく暮らすようになります。合理的に生活しているはずの彼らの顔は、なぜかどげどげしく不機嫌で、とても幸せそうには見えません。彼らは、以前のようにモモのところへ行くことさえ時間の無駄と考えるようになり、自分の気持ちをじっと見つめることなど無くなりました。大勢いたモ

モの友達はずいぶん誰も訪ねてこなくなります。

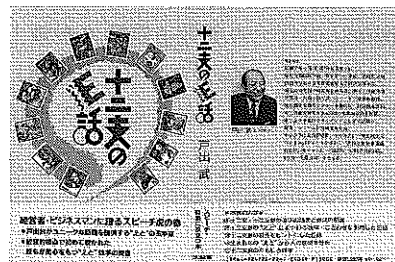
モモは来なくなった友達をたずねていくことからはじめ、最後に、みんなを救うべく「灰色の男たち」と戦い、そして「灰色のたち」が人々から盗んだ「時間」を取り戻してあげるのですが、そのスリリングな過程や美しい「時間の国」の話は、実際にこの本を読んで楽しんでいただくと、私の感想を少し書きたいと思います。

この物語のなかでモモに助けてもらう人々がちょうど私のように思えてなりません。なにかといえば時間が無い、暇が無いといい、ゆとりを持ちたい、心豊かに暮らしたいとの希望とはうらはらに、いつも目先のことばかり考え、せかせか動き、気持ちちはあせる。そしてまわりへの思いやりもなくなってしまふ、これは、「時間の無駄遣い」を許さない「灰色の男たち」にすっかり毒されているようです。そんな私には本当に耳が痛いのですが、物語の中にこんな文章があります。「時間をケチケチすることで、ほんとうはぜんぜんべつなのにかをケチケチしているということには、だれひとり気がついていないようでした。…時間とはすなはち生活なのです。そして生活とは、人間の心の中にあるものなのです。人間が時間を節約すればするほど、生活はやせほそって、なくなってしまうのです。」豊かに暮らすためには、豊かなこころでいなければならない、まわりを気にするのではなく、自分自身をみつめ自分らしく生きること、これが大切だとモモはそう教えてくれているようです。

そのタイトルから、かわいらしい童話だろうとおもって読み始めたのですが、途中で考えさせられることが多く、読み終えるまでにずいぶん時間がかかってしまいました。
(富重 慶子)

「十二支のE話」

戸出 武 著 (大龍堂刊)



戸出さんがこんな本を書かれるとは思ひも及ばなかった一という感じの本であった。とにかく本書の内容を紹介すると、①十二支・十二支獣の漢字の語源と意味の解説、②十二支獣の“えと”にまつわる故事・ことわざを引用したE話、③十二支獣の習性をヒントにしたE話、④生まれ年の“えと”から人の性格を分析、⑤十二支獣のおもしろ雑学となっている。

戸出さんと出会ったのは(財)産業情報センター事務局長をしておられたときで、それ以来、私はそのコーディネーターぶりに注目している。(現在システム経営研究所長)

本書のみならず、「異業種交流のすすめ」(ダイヤモンド社)などもおすすめしたい本である。

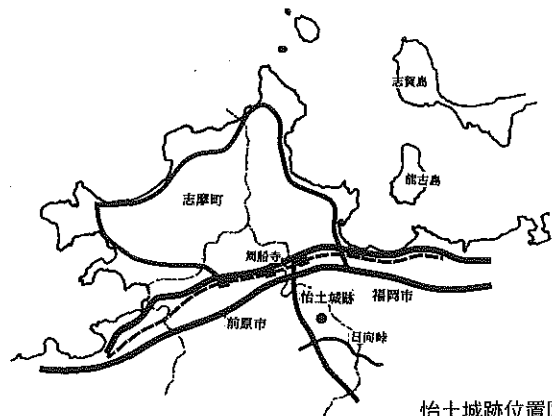
(糸乗 貞喜)

大規模な防御陣であったのかな

伊都の国の山城址

「魏志倭人伝」には対馬国、一支国、末盧国、伊都国、奴国などが出てくるが邪馬台国はともかく、これらは現在の壱岐の島、松浦半島一帯、糸島半島一帯、那の津である博多一帯をさすということに異論はないと思う。

私共の事務所のある奴国から伊都の国へは国道202号線で隣合っつながっているわけだが、魏志倭人伝とか怡土城の頃は、もっと海岸線がせまっていたはずである。その証拠に、博多駅から地下鉄に乗って唐津へ向かうと周船寺という駅がある。これは大宰府の主船司の駐在地であったことを示している。内陸側を通過して伊都の国へ行くには日向（ひなた）峠を通る。奴国から標高250メートルくらいの峠へ出ると（実際は車で行っている）、伊都国が一望のもとに見渡せる。先には末盧国と思える山々もうかがえる。倭



怡土城跡位置図

人伝に書かれている帯方郡の使者もやって来た道かもわからない。伊都国は末盧国より平地が開けており、稲作文明のはしりの土地だったかもしれない。

また、怡土城は、当時の遺構の残存状態はよくないが、石畳、土畳が方々にあり、築城に10余年かけていることから考えても、重要な城であったと考えられる。

(糸乗 貞喜)

【編集全記】“よかネット”編集の現場

毎週、皆でもたもたと

とにかく1年間続けることができました。3号までは続けたい(3日坊主並になりたい)と言っていたのですが、7号になりました。

私事になりますが、私は今タバコを喫っていません。そのきっかけというのは、1980年の12月29日の朝9時頃のことです。京都の事務所経営責任者としての年末の片付けをすべく出勤するところだったのですが、その時風邪気味で喉を痛めているにもかかわらず、ついついタバコを口にくわえてしまいました。「おまえはあきれたヤツだな。喉が痛いのはわかっているだろう。一寸くらい我慢

できんのか」。「なるほど、じゃあ昼まではやめとくか」と自問自答して昼まで会議中も我慢しました。それでも喉の具合は変わらない。「まあ夜まで我慢するか」となり、ついで翌朝までとなり、半日、1日くらいずつ喫っていない日が続いています。したがって、私にとっては今でも「タバコをやめた」という気分はありません。

“よかネット”の製作も、1回1回よたよたとやっています。私共の事務所の経営自体、確乎とした方針や展望があるわけではなく、とにかく「知的サービス業は、知的な仕入れをしようとしているということと、それを皆様方にサービスとして提供しようとしているという気持ちが伝わらないと喰っていけない」ということを月曜の事務所会

議毎に言い、その一つのネットワーク活動として始めたもので、1回ごとのつもりで続けています。

編集は当番持ち回り制で

責任者は、糸乗、山田、山辺が交代で、編集作業は他の所員が2人で、1人ずつ入れ替わって担当しています（今号は糸乗、尾崎、歌丸）。具体的には、毎週行われている月曜事務所会議のとき担当者が全員に相談して、「ネットワーク」、「見・聞・食」、「近況」、「本・BOOKS」など、所員のストックを聞きながら予定をたてていき、あとはヤイヤイ催促し、もたもた→ワープロ→印刷渡し→発送という手順です。

月曜会議自体が、所員の所内向け知的サービスのチャンスなのですが、この“よかネット”は対外的な知的サービスのチャンスでもあります。

私共の習作をお届けしていることになり誠に申し訳ないかぎりですが、所員の励みになっていることを汲み取っていただき、御容赦願います。

ほめてくださる方もある

夏の号で「宛先確認のハガキ」を入れさせていただいた

のですが、たくさんの返信をいただき、大変励みになりました。中には、毎号一言ハガキに書いてくださる方もあり、所員一同感激しています。

大変高名な方から、次号からは自宅に送れと言っていたり、「いつも小さいけれど（これがとても大切なこと）ステキなニュースありがとうございます」などと言われると嬉しくなります。

カラー印刷でもなく、小さい手づくりのニュースレターですが、私共の甲斐性の範囲内で、所員全員がかりで今後も続けていきたいと思っています。

今のところは所員だけですが、このミニ・ニュースレターに投稿してやろうという方もおられるので（今号池田さんの御協力をいただきました），“よかネット”の輪が少し広がるかもしれません。今後も御愛読のほどよろしく願います。

編集員兼所員一同

糸乗貞喜、山田龍雄、山辺真一、歌丸星子、富重慶子
神野みつえ、宮原真一、北村茂樹、伊藤聡、尾崎正利

よかネット NO.7 1994. 1

(編集・発行) ㈱九州地域計画研究所 TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673
〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132	FAX 075-256-1764
大阪事務所	TEL 06-942-5732	FAX 06-941-7478
名古屋事務所	TEL 052-962-1224	FAX 052-962-1225
東京事務所	TEL 03-3226-9130	FAX 03-3226-9560
㈱服部メデイカル研究所	TEL 03-3465-3147	FAX 03-3465-3146
㈱地域づくりネットワーク	TEL 06-357-2725	FAX 06-357-2740
㈱地域総合プランニング研究所	TEL 092-714-5297	FAX 092-714-5298
㈱未来プラン	TEL 092-722-0220	FAX 092-722-1391